

平成 1 8 年度海外派遣農業研修生

ハイライト:

- ・記念講演 「攻めの農業」
- ・参加報告 牛にひかれて
- ・訪問記 奇跡の村を訪ねて
- ・海外便り 未知の国エリトリア
- ・公開講座 異文化共生
- ・イベント 帰国報告会

目次:

新しい研修事業	1
壮行会記念講演	2
畜産シンポジウム報告	4
胎内リゾート訪問記	6
海外便り「エリトリア」	8
1 8 年度派遣事業概要	9
スクラップブック	10
講演・出版案内	11
ご協力をお願い	12
帰国報告会・総会のご案内	13

研修事業が変わりました!



(社)国際農業者交流協会が実施する派遣事業のプログラムが新しくなりました。

・米国コンビネーションコース(18ヶ月)
大学の学習と農場実習を組合せた研修
派遣人数: 70名

・欧州プラクティカルコース(12ヶ月)
これまでの欧州研修と同じ
派遣人数: 45名(全欧州合計)

・米国プラクティカルコース(12ヶ月)
ミネソタ州立大学MASTインターナショナルを受入団体とする農場実習主体プログラム。
派遣人数: 10名

* 詳細は9ページをご覧ください。

■ 啓発活動を開催しました

神宮 清子(H10/米1)

今年も新入生が入学し、新学期が始まりました。2年間の短い専門課程ですが、早い時期より将来について広い視野を持って考えてもらえるように、オリエンテーションの一環として、去る5月12日(金)東京F I A主催による研修事業の啓発活動を開催いたしました。

当日はF I A理事で(社)国際農業者交流協会派遣業務課の吉川隆志兄と今春帰国したばかりのドイツOGの森田さんに来校していただき、「未来へ、世界へ、大きく羽ばたこう」をテーマに、事業の概要、実体験など映像を交えてわかりやすく説明をしていただきました。

終了後のアンケートでは「海外に興味が出た」、「卒業後に研修に参加したい」などの声が多く出て、派遣事業を通して「活躍の場」が日本だけではないことを知ってもらえたと思います。今後も学生たちに刺激を与えるべく機会あるごとに啓発活動が続けていきたいと思っています。本校は4月より校名を「国際園芸セラピー専門学校」から、「国際健康植物科学専門学校」に改めリニューアルいたしました。従来の園芸セラピー科が「動植物セラピー学科」に、グリーンフラワーガーデニング科が「花卉園芸学科」にリニューアルし、新しく「健康植物調理学科」が加わり、3つの学科でスタートしております。今後ともよろしくお願いいたします。





熱心に聴き入る参加者

当日参加してくれた
国際ビジネス専門学校の
生徒さんの感想です



教室には高価な輸入果物が並びました

平成 17 年度壮行会記念講演

「攻めの農業」 岡添裕章 (S53/米2) I P M西本(株) 取締役



オレンジ、メロン、マンゴー、ブドウ etc



国際ビジネス専門学校 1 年 神野舞子

現代人は時間に追われている為か、毎日とても忙しく、食事に多くの時間を取ることができません。また料理を時間かけてつくり、家族全員が食卓を囲んで食事することは一昔前であったら、あたりまえの日常でしたが、私の家でも家族の生活の時間が異なるせいか、全員が食卓につくことは滅多にありません。食生活も大きく変わり、時間をかけずに美味しく便利なものがすぐに見え、時間のない現代人にとって短時間で空腹を満たせる便利な食べ物が氾濫しています。野菜を使う料理は調理に時間がかかり、果物は皮を剥かなければならないため、私自身もほとんど摂りません。野菜や果物を摂らなければならないことはわかっているのですが、近年の異常気象などで野菜の価格が上がり、多品種を一度に摂ることは難しいと思います。最近では野菜ジュースやスナック菓子にも野菜やレーズンなどの乾燥した果物を使ったものもあり、さらにサプリメントなどでも、手軽に買えるため、野菜を摂っている感覚になります。

今回の岡添氏の講演を聞き、日本人の野菜や果物の消費量が諸外国に比べてとても低く、また消費量が減ってしまっていることを改めて知ることができました。やはりひとり一人が食の意識を変えることでしょうか。最近では「野菜を摂ろう！」などの、キャッチフレーズをよく耳にし、スローフードやマクロビオティックなどといった食に関する考え方の話題が多いと感じます。このことは多くの人が食に関心を持ち、食生活を自ら見直し、健康で長生きをしたいと思っているからなのではないでしょうか。

講演終了後、近くのスーパーに立ち寄り、家族に果物をお土産に買って帰りました。

平成17年度壮行会

岡添氏の講演会に引き続いて、平成17年度F I A推薦者の壮行会と懇親会が行われました。講演の話題にもなった岡添氏の会社の扱う高級輸入果物も饗され、千葉県組織の藤代兄、J A千葉みどりの中原顧問など遠方から講演に参加していただいた方々も宴席に加わっていただきました。出発を直前に控えた研修生に実習への決意を一言ずつ表明してもらいました。

本年が最後の派遣となる米国2年制を残して欧州、ハワイの3名はすでに実習につき、各々厳しくも楽しい毎日を過ごしていることでしょう。

本年度F I A推薦者

伊藤 志織	スイス
Fam.Peter Boesiger-Berger (野菜)	
目澤 加奈	スイス
Fam.Alois Huber (酪農、野菜)	
塚原 幸恵	ハワイ
Hirako Farm (野菜農家)	
熊倉 良介	米2 (肉牛)
佐藤 亮平	米2 (野菜)
狩野 誠	米2 (野菜)



I P M西本株式会社
<http://www.ipm.co.jp/>



目澤加奈(スイス)

壮行懇親会アルバム



塚原幸恵(ハワイ)



伊藤志織(スイス)



熊倉良介(米2)

畜産経営衛生向上国際シンポジウム報告書

牛に惹かれて新神戸

村田 正 (S54/米2)



会場となった
新神戸オリエンタルホテル



スライドを使っ
ての基調講演



シンポジウム終了後の
懇親会



記念品授与

■シンポジウムの開始時間から1時間ほど遅れて新神戸駅に隣接したオリエンタルホテルに到着、会場に向かうと広い受付が待っていた。急いで受付をしようと近寄ってみると「パン製造業」という文字が目に入る。「なんか変だなあ」と念のため受付を通り過ぎ角を曲がると、裏手にもう一つの受付があった。こちらが「畜産シンポジウム」の受付だ。受付をすませて会場に入る。入口脇のテーブルに牛乳パックが3種類、そのうち一つを頂いて中に入ると、会場は大勢の参加者でいっぱい。本間会長が先に来ているはずだがここでは探しようがない。とりあえず右手奥の後ろの席を確保した。ちょうどはじめの講演が終ろうとしているところらしい。とりあえず写真でも撮っておこうと、右端の通路をズンズン前に……。会場の写真を数枚撮って戻る途中、近くに目をやると前の方にはちらほら空席がある。荷物をもってやあ前席に移動したのは良かったが、着席してからそこが「記者席」であることに気がついた。隣の方が「記者」だったのかどうかは不明だけれど自分が「記者」でないことだけは確か、ちょっとバツが悪かったけれどそのままそこで聞くことにした。

同時通訳のイヤホンを耳につけ、講演に聞き入る。講演二人目は、ニュージーランド農民連盟副会長ニコルソンさんの話だ。冊子の略歴を見る。「1957年生れ」、同い年じゃないか。それではと、前のページ農民連盟会長ベダーセンさん、「1956年生れ」、一つしか違わないじゃないか！驚く。

さて、知っている人は知っているだろうからあくびでもしながら読んで欲しい。ニュージーランドの人口は400万人しかいない。国土は日本の2/3、なんとという人口密度！！農作物のほとんどは輸出される。人口がこんなに少ないんだからある意味あたり前。乳製品の処理・加工・販売は巨大酪農協フオンテラがほぼ一手に引き受けている。牛は放牧されているのでコストが安い(たぶん?)。その上、牧草のない時期(冬)は牛乳を出荷しない。(コストが合わないから?)合理的だ！牛乳はH A C C P (ハサップ)による品質管理が行われる(日本もそう?)知っての通りニュージーランドは行革先進国だ。農業に国から補助金はほとんどない。農民はいろいろなコストを自分たちで支払う。「そこに創意工夫が生れ、農業がより進歩する」という考え方のようだ。ネットでそのことを調べたらP H P研究所の「ニュージーランド行革物語」からの文節があった。引用してみる。

■農業の改革

- ・以前は農業で使うもののほとんどに補助金がついていた。
- ・また、農産品には、これ以上安くはしないという最低保証価格がついていた。
- ・これは、納税者が負担していたことになる。
- ・多くの学識経験者が、このままでは農業は破綻すると心配した。
- ・都市住民は自分たちが高いインフレや高い物価で苦しんでいるのは、地方の農家に補助金を与えているためだという気持ちが強くなっていった。
- ・都市住民と地方住民との間で厳しい対立関係が生じてきた。
- ・農業改革はどうしても避けられないという情勢ではあった。
- ・補助金のほとんどは改革のスタートと同時に廃止された。
- ・「改革のメリットは、農民が自分自身でやり方を考えて、より効率的にやるようになったことにあるのではないだろうか」

最近では行き過ぎた行革で問題が生じているというニュースも聞く。農家は飼育頭数によってフオンテラにお金(組合費?)を払う。フオンテラは個々の農家に代わっているいろいろな面倒な業務を引き受けているので、飼育頭数に応じてお金を払うという仕組みも合理的と言える。そんなニュージーランドでも後継者不足はあるようで、農家がお金を出し合って若者向けのテレビ番組を放映したり、都会でアウトドアライフの魅力をアピールしたりしているようだ。日本でも最近「田舎暮らし」の番組を良く見るけれど、これは農家がスポンサーになっているのだろうか?なんか違うような気がするが……

LIFE DESIGN LAVO より引用
<http://www.asahi-net.or.jp/~PV3N-SITU/ngyu.html>

■さて、私と同じ年のニュージーランドのニコルソンさんのお話も終盤になりました。「世界の消費者」と言うキーワードが出てきました。さすが農産物輸出大国、「消費者」といっても「世界」が枕に付いています。話を聞いているうちに、ふと気が付くことがありました。話はこんな内容です。「世界の消費者の畜産に関する見方は今後、家畜の福祉や生活に向けられる。デンマークでは養豚業において法律で家畜の福祉が細かく定められている」という具合です。これは昨年、宇都宮のシンポジウムで聞いたことではなかったのだろうか?と、思ったのです。ヨーロッパでは自然保護団体などの圧力により「家畜の住環境」について農家が厳しく攻撃され、過激な活動家がニトリ小屋に忍び込んでニトリを小屋から「自由の身」にしたというニュースを聞いたことがあります。日本の調査捕鯨についても欧米からの反発は相当なものがあるようです。日本で「家畜の住環境」という考え方はどうなのでしょう?もう一般的になってきているのでしょうか?先日、「世界ウルルン滞在記」に出てきた「イベリコ豚」の話もしましたが、スーパーで「無菌豚」と言う表示は良く見かけますが、「放牧10頭/ha」なんていう表示を見たことがありません。ストレス環境下で飼育された家畜はそれを食した人に悪い影響を与えるのでしょうか?それとも単純に「人間は家畜の住環境にも責任を持つ必要が

ある」ということなのでしょうが？

■それはそれとして、私が気が付いたのはそのことではないのです。ニュージーランドのニコルソンさんは白人です。おそらく、オーストラリアからか、それともヨーロッパからか、はたまたアメリカからやってこられた方でしょう（本人でなくお父さん、おじいさんかも知れませんが）。ニコルソンさんの話の「世界の消費者」につづく内容を良く考えてみると、この場合の「世界」というのは、もしかしたら「ヨーロッパとアメリカ」だけのことを言っているんじゃないのかな？という疑問です。そこではたとえ気づきませんでした。この場合の「世界」とは「大口の輸出先国」のことを言っているんですね。そりゃそうですよね。耳にあてたイヤホンの中から優しい女性の声で「世界の消費者は・・・」と言われたものだから自分で考えることをしばし忘れてしまっていたようです。神戸から戻った次の日に、アメリカからの輸入牛肉に背骨が混入していた事件が起こりました。こんな凡ミスがなぜ起こるのか不思議ですが、アメリカ国内では、生後30ヶ月以内の牛は「BSEの危険はない」と言うことになっているようです。「国内で流通しているものがなぜ輸出できないのか？」アメリカの業者にすれば不思議と言えは不思議な話ですね。話がそれました。今回はニコルソンさんの話から「世界」の捉え方には違いがあることを学びました。

■ニコルソンさんの話の締めくくり政府の補助金についての言及がありました。「補助金の廃止は納税者にとってメリットになるよう政府に対してより効率化をもとめることになる」う～ん、こうして文章にして読み返してみると、あらためて意味するところの深さを感じる。納税者とは国民のことですが当然農家のことでもあります。そう置き換えてみると「農家の補助金を廃止するなら、それに関しての役所の仕事も当然減らしてくださね」と言うことではないのでしょうか？それを裏付ける話として、この話の前にこんなことも言っていました。「農家は競争の中でソリューションを自ら発見するし、農家自身が作り出していかなければならない」つま

り政府の指導のもとでなく農家が直接社会に働きかけていくということではないのでしょうか？フォンテラという巨大農協が個々の会員の意を受けて、後継者育成のためのプログラムを実行し、テレビ番組を制作し、社会に直接アピールする。役所は必要最小限にまで機能を絞り込む。いままで1つの機能を10人がかりでやっていたことを、極端に言えば最小限に絞られた10の機能を1人でこなすことが求められていくということです。はたしてこれは人口400万の国だからできたことなのでしょう？日本の行革はどこまで役所の機能を絞ることができるのでしょうか？そして国民はどこまで自分たちでそれに替わることができるのでしょうか？

■さて、いよいよ最後にご登場は国農協の塩飽理事長総括講演です。「日本の畜産業を取り巻く世界情勢」と銘打たれていましたが、ほとんど台本もなく世界における日本農業の問題点をピンポイント指摘するお話は、さすがでした。いろいろお話いただいたのですが、ざっくりまとめてしまうと次の2点に要約されるのでしょうか。

1. 日本の自給率はこれまで減りつづけてきたが、食糧安全保障、環境保全など農業の持つ多面的な役割を考えると、これ以上の減少は止めなければならない。

2. WTOにおいて国内農業を保護するための補助金、関税は各国とも削減される方向にある。

■この2つのポイントは「あちらを立てればこちらが立たず」的なポイントです。理事長によれば「今後のWTO交渉ではギリギリの譲歩をせざるを得ない状況に必ずなるが、(1.)の状況も十分わかっているのだから、当然それを踏まえた上で交渉に臨むことになるだろう。いずれにしてもこのような交渉は、心配してもどうにもならないのだから専門家にまかせた方がいい」ということでした。このような世界情勢の中で、日本の農家はどうすればいいのか、ヒントになるお話もありました。「日本は食品の安全性、衛生管理など世界的に見ても高レベルな国民だ。輸入農作物が増えれば、確かに競争は激

化するが、日本の農家はこのような国民性をどこの国の生産者より熟知しているのだから、それをプラスに変えて競争に打ち勝つ方法を考えるしかない」「農作物の衛生面においてゼロリスクを求めることは非常にコストがかかることを認識しなければいけない」

■理事長の話から昨今の社会現象を眺めてみると、好むと好まざるにかかわらず「世の流れ」と言うものが「方丈記」の時代と同じように流れているんだなあと、つくづく感じます。以下、独断的近未来予測です。

■国産農産物は差別化をはかるために「品質管理」「衛生管理」という意味で、これまでの規格がさらに細分化され、それをチェックする機構が次々と生れ（役所の民営化とともに天下り先が確保され）、農家と消費者はとんでもないコストを負担することになるでしょう。一方、米国産牛肉問題を考えるまでもなく「輸入農作物」においては、ほとんどすべての作物が完全自由化あるいは低関税率となり、「日本の基準にあったものを輸入する」のではなく各国の安全基準にあったものならその表示義務と引換に輸入ができるようになるでしょう。消費者は「生後30ヶ月以内・脳・内臓除去済み」、「有機野菜・中国基準」等のアバウトな表示を見ることができるようになるでしょう。あとは買う人の「自己責任」。タバコのようなものなのでしょうか。この流れは本当にそこまで行き着くことになるのか？それとも「農作物に工業製品のようなゼロリスク管理は無理でしょう」という常識が新たなトレンドになるのか、難しいところではあります。仮にゼロリスクを捨てたとしたら「輸入品でもいいでしょう」ということにもなってしまいますよね。

* この文章はメーリングリスト「海外農業研修生OB情報」に投稿したものです。



* シンポジウムの詳細は国農協のホームページでご覧になれます。
<http://www.jaec.org/event/forum/index.htm#simo>

胎内リゾート訪問記

伊藤 一男 (S32/米3)

練馬インターから3時間半
奇跡の村を訪ねる



胎内観音

■ 主宰する「みずほクラブ」のシンポジウム開催が延期になったお詫びをかねて、話題の旧黒川村胎内リゾートを訪ねてみた。

東京練馬インターから関越高速で35.8km、中条のインターを出て旧黒川村胎内に到着まで、途中の休憩時間を入れないと3時間30分、意外と早かった。歴史博物館を右に見て平野部から山あいに入っていくと、熊本の我が故郷に帰ってきたような錯覚に思わず車を止めた。左側が田圃で、胎内川の堤防の上の道にびっしりと植えられた桜の並木が続く。我が故郷の緑川を遡上する風景とまったく同じなのは驚いた。ロイヤル胎内パークホテルには、宮野副支配人（海外農業研修生OB）と布川陽一社長（前黒川村村長で海外農業研修生OB）自ら迎えてくださった。早速、胎内を案内してもらった。もともと、リーダーシップを取られた伊藤前村長（故人）はカリスマ的発想と指導力を備えた人材であったようだ。出稼ぎに頼って生きる寒村の変革を志し、若者を集めて共同農場の開拓をスタートさせたことでも納得できる。大きな変化のきっかけになったのは、昭和42年の土石流による大災害だった。案内された胎内観音境内には38名の犠牲者を出した生々しい写真が展示され、想像を絶する災害を忍ぶことができる。この復興に激甚災害指定を受けて村の再建に取り組まれたのが政府援助を如何に活用するかという大きなヒントだったようだ。

■ 人材育成こそ村興しの原点

伊藤前村長の頭の中には、「この寒村の我が村の住民に安定した幸せな暮らしをもたせたい」という考えが強烈にあったに違いない。共同農場の発想に見られるように、資本主義的な考えより、むしろ社会主義的な発想の持ち主ではなかったろうか？ なお、特筆すべき事は、いくらトップにアイデアがあり、資本を調達できても、それを実践する人材が居なくては夢は実現しないと判断したことである。既にドイツで農業研修を終えていた布川陽一OBを役場に迎え入れた。そして、社団法人国際農業者交流協会が実施する海外農業研修生制度に次々と若者を送り込んだ。その数は、人口6,000人の村で布川OBを筆頭に既に26名、自治体主導でしかも村が資金を援助して海外研修に参加させるという例は全国を探しても見当たらない。しかも、そのOBたちが、期待に応じて全員村の中核となって村興しのリーダーシップを担っている素晴らしい姿を目の当たりにすることができた。なかでも実践の先頭に立った布川OBの人間的魅力が後輩達を育ててきた事はもっとも大きな貢献だろう。これは吉岡忍氏が言うような奇跡ではなく、将来の村興しを展望した人材の育成から手掛けた叡智とそれに応えてくれた研修生OBの努力の融合以外の何ものでもない。



ロイヤル胎内パークホテル

胎内高原ビール園



胎内リゾート
<http://www.tainai.info/>

■補助金の活用は生産性が前提

確かに黒川村は情報とチャンスを活かして国の補助金をしっかりと導入して活用した。しかし、全国各地の自治体の多くは、いわゆる箱物といわれる○○会館、○○センター、に代表されるように生産に繋がらない建物や施設に補助金をつぎ込んでいるが、ここではすべてが生産に結びついている。全部を紹介は出来ないが、ドイツから一部プラントを導入したビール工場、畜産団地で生産した原料で作るチーズ、ヨーグルトやハム、胎内の水、麦茶、漬物、ワイン、日本酒、チューリップ染め、そば、有機農産物などなどである。

■サービス業はリピートを期待

外部からの観光客を誘致する発想のきっかけは既に存在していた村営のスキー場だったようだが、観光客のリピートは「また来たい!」と思ってくれる設備とサービスである。

5年前に完成した新しいロイヤル胎内パークホテルは東京のトップクラスホテルに遜色はない。従業員教育も一流ホテルで1年間の研修を受けさせ、サービスには万全を期しているようだ。リゾート内には「胎内自然天文館」「昆虫の家」「クレーンストーン博士の館」「黒川石油公園・シンクルトン記念館」など、子供が学習できるたくさんの施設がある。自然天文館は当然のことながら、文明の明かりがまったく見えない星空観測には最適の場所にある。ここはかつて、大洪水後の復旧を見ていただくために誘致した天皇陛下臨席の「植樹祭」が行われた場所でもある。その後、皇太子臨席の育樹祭も行われた。星祭りは毎年8月下旬に行われるが、1984年開始以来、人気のイベントで、当日のホテルは1年前から予約が埋まってしまう人気である。

■ハロウィンのかぼちゃ品評会



本田親盛08（国際農業者交流協会前常務）から贈られたカボチャの種が、農家に配布されて育てられたカボチャが持ち寄られてハロウィンのイベントが行われる。優勝者には贈り主の「本田賞」が贈られる。なお、この日に出される料理、ケーキ類すべてがカボチャで作られたものというのもおもしろい。

■経済特区に

第3セクターではなく、自治体自らのマネージメントで村興しをここまで開発した例は全国の中にも他に無いのではなかろうか。それによって住民による生産から加工、販売、サービスに至るまで職場を確保するという事は、自治体にとっては夢の実現である。ただ云えることは自治体（公共）の設備としての限界がかいま見える。公共設備としての縛りがあるのだろうか？商業的な打ち出しに弱さを感じてしまう。胎内に繋がる道路にはほとんど胎内の案内看板らしきものを見かけなかったのが、その表れのように感じられた。政府が打ち出した特区制度があるのだから、稀に見る自治体による立派な開発を育てるためにも経済特区に指定される事を期待したい。



胎内フラワーパーク



胎内高原ゴルフ倶楽部



奇跡を起こした村のはなし
吉岡忍 著 筑摩書房
¥798

海外便り

「えっ、エリトリア？
どこにある国？」



エリトリアは
紅海に面しています



エリトリアの子供たち

アフリカ エリトリア国にて

佐々木 忠弘 米2 S54

■平成18年2月21日より1年間の予定で、独立行政法人国際協力機構（通称JICA）からアフリカ大陸北東部に位置するエリトリア国に、同国における日本政府の国際協力事業（いわゆるODA）を総合的に連絡・調整する「援助調整専門家」という業務で派遣され、同国で対外的な援助の窓口となっている国家開発省本省に勤務しています。今回の勤務は、昭和57年10月から2年間、当時のJICA（特殊法人国際協力事業団）から青年海外協力隊員として派遣されたケニアに続き、22年ぶり2回目のアフリカ勤務ですが、前は、ボランティアとして、ケニアの田舎で、現地の農民たちを相手に、野菜栽培の技術指導に従事したのに対し、今回は、首都の中央官庁で、国家の大臣、局長級と、同国に対する日本の各種援助事業に関し、協議したりするという重要任務で、私もこの22年間で、いくらか出世（？）したのかなという感慨を抱いています。タイミング良く、私が当地に出发する直前（2月18日～19日）に、神奈川の三浦海岸で、派米研修14回生の同期会が開催され、その時、多数の同期生から「えっ、エリトリア？、どこにある国？」との質問が寄せられましたが、それもそのはず、エリトリアは、かつてエチオピア国（マラソンのアベベ選手の出身国として有名）の一部であった地域が、1993年に独立したアフリカで最も新しい独立国（人口約400万）で、国際的な認知度はまだまだ低いのです。

■さて、エリトリアをちょっと紹介すると、一つの国として独立したのは最近ですが、この国は、人類発祥に近い100万年近い歴史があり、同国から類人猿の頭蓋骨（愛知万博でも展示）などが出土しているほか、紀元前2000年以上にも遡る古代エジプト王朝と覇権を争った文明の痕跡も残っていたりします。近世では、19世紀後半にイタリアの植民地となり、第二次大戦のイタリアの敗戦で、短期間、英国の統治下にあった影響もあり、首都アスマラ（人口約50万）には、イタリア様式の古い建造物が、多数残っているほか、国民の多くが英語を話せるという特徴があります。人種的には黒人の国ですが、中近東のアラブ圏に隣接するため、ウービー・ゴールドバーグやダニー・グローバーのような、ぼっちゃり・でっぷりな容姿ではなく、ナオミ・キャンベルやデズレル・ワシントンのような容姿端麗、スタイル抜群な人が多いほか、イタリア系（移民の子孫）やアラブ系の人種もいたりします。

■まだまだ、知名度が低い上に、隣国のエチオピアと国境画定を巡って、数年前に武力衝突したことから、現在、国連の平和維持部隊（PKO）が駐留しているため、危険な国というイメージが先行し、当国を訪れたり、滞在したりしている外国人は、国連機関職員や各国の外交官、NGOなどの援助関係者などに限定されており、長期滞在している日本人は、私を含め4人（3人はJICA派遣で、1人は国連機関の職員）しかいません。また、最近、外貨不足の影響で、発電用の重油の輸入制限などもあり、停電が頻発しているほか、ガソリンの価格が日本の2倍くらいするなど、公務員の月給が1万円程度の庶民の収入基準では、生活条件がかなり厳しいのですが、国民性は、いたって温厚、誠実で、かなり勤勉です。街中の治安状況もかなり良好で、アフリカの大都市には非常にめずらしく、夜中に外国人や女性が一人歩きしても、全然危険性を感じない状況で、最近の日本より、ずっと安全な国といえるかもしれません。これは30年以上におよぶ独立闘争を経て、独立を勝ち取ったという高い誇りや、この独立闘争を異部族や異宗教の垣根を越えて一緒に戦ったというエリトリア国民としての一体感が、アフリカのほかの国で多発している複数の部族による権力闘争や異宗教間での対立を生じていないということなどに、起因しているのかもしれませんが、しかし、長く続いた独立闘争や数年前の隣国との武力衝突などの影響で、道路、橋、鉄道、水道、学校、病院などの生活・社会基盤が、老朽化や戦禍で、疲弊しているほか、最近の旱魃の影響で、食糧自給率が日本より低い30%と、アフリカの最貧国の一つというのも事実であり、清貧な国民性もあり、自助努力を国是としているものの、国際社会からの支援は、まだまだ欠かせない状況です。日本政府としては、独立以来、食糧援助などの人道援助を中心に、これまで70億円以上の援助をしてきましたが、昨年くらいからは、復興支援にも取り組みはじめ、現在は幹線道路上の橋の復旧、地方都市における水道施設の新設、除隊した元兵士に対する職業訓練などを実施しています。

■私は、今回は、治安上の理由などから、妻子を家内の母国であるベトナム（ホーチミン市）に里帰りさせての単身赴任ですが、標高2,400mに位置する高原の首都で、週末は現地で購入したマウンテンバイクを乗り回して、高地トレーニングよろしく、健康維持に努めながら、久振りのアフリカ生活を楽しんでいます。また当国には、同じく派米研修（29回生）のOBである平野敏夫さんが、日本の国際協力NGO（JEN）の仕事（帰還難民支援）で時々来訪するので、たまに会食などして交流しております。

平成18年度農業研修生海外派遣事業の概要

アメリカ・コンビネーション・コース (学習・実地研修統合型プログラム)



この研修コースは、日本人農業研修生のためだけに日米政府間合意の下に作られたユニークな研修制度です。
大学における学習と農場実習を効果的に組み合わせ、理論と実践の両面から各自の専門コースと農産物市場・流通及び農業経営の研修ができるプログラムです。帰国前には研修生自身の旅行計画による約2週間の自由研修旅行が組み込まれています。
渡航前に海外農業研修を経験したOB/OGの農場における2ヶ月間の渡航前実習が組み込まれていますので、大学等の教育機関を卒業直後に参加する方、あるいは、実習経験が不足している方などにとって、安心して準備を整えることができるプログラムです。

① 基礎学習 (約1.5ヶ月間)

ワシントン州ビッグ・バンド・コミュニティ大学で実施。英会話、アメリカの文化習慣、アメリカ農業概要、農業機械操作、自動車運転免許取得等。

② 農場実習 (約13ヶ月間)

各自の専攻職種に応じた全米各州の配属農場における実習。
専攻職種：酪農、肉牛、養豚、養鶏、野菜、畑作、鉢物、切花、造園、落葉果樹

③ 専門学習 (約2.5ヶ月間)

カリフォルニア州立大学デービス・キャンパスで実施。大学近郊の一般市民家庭にホームステイ。農業経営に関する学習、アメリカや世界の農業と市場の動向、最新生産・流通技術情報、英会話等。

アメリカ・プラクティカル・コース (実地研修特化型プログラム)



ミネソタ州立大学MASTインターナショナルを受入団体として行うプログラムで、農場実習を主体としていて、個人の目的に絞った研修を行うことが可能。休暇を利用した研修旅行や視察など、農場主と研修生の間で研修日程の調整ができる柔軟性を持ったプログラムです。

そのため、英会話、農作業経験等において、ある程度の能力を備えた方に適しています。専攻職種、あるいは、配属農場の形態によっては、12ヶ月に満たない場合があります。また、夏季にはショートコース・プログラムとして約1週間のセミナーが組み込まれています。

専攻職種：酪農、肉牛、養豚、羊、馬、野菜、畑作、鉢物、切花、造園、苗木、落葉果樹、柑橘

ヨーロッパ各国・プラクティカル・コース (実地研修特化型プログラム)

現地で2〜3週間の到着時語学研修を受けた後、1年間の農場実習を行います。また、実習効果を高めるための各種セミナーが行われます。帰国前には約2週間の自由研修旅行が組み込まれています。参加者には、ある程度の農業経験が求められます。

デンマーク



畜産（酪農、養豚）を中心とした畑作との複合農業を行っている大規模家族経営農場において、家族と生活を共にしながら実習を行います。また、一部ではありますが、バイオガスを利用した経営を行っている農場での実習も可能です。
専攻職種：酪農、養豚

ドイツ



今後の日本農業の方向に多くの示唆を与えてくれるドイツ。ここでは、畜産や園芸部門の実習を行います。また、一部ではありますが、バイオダイナミクスに基づいた有機栽培農場での実習も可能です。
専攻職種：酪農、養豚、鉢物、落葉果樹、露地野菜（有機栽培を含む）

スイス



しっかりした農業政策のもと、典型的な複合農業を行っている農場において実習を行います。特色は、畜産と組み合わせた多角経営が学べる点です。女性研修生は、農家の主婦の日常生活を学ぶほか、約2週間、家政学校において農産加工や手芸などを勉強します。男性研修生は、女性研修生とともに約1週間の家政学校における農産加工の研修が組み込まれています。
専攻職種：複合（酪農・養豚・果樹）、野菜（有機栽培を含む）、家政（女性のみ）

オランダ



厳しい競争の中で絶えず世界の施設園芸の最先端を行くオランダ。常に世界市場に目を向けた企業経営の農業が学べます。花卉のほか、野菜や酪農の実習も行えます。また、一部ではありますが、IPM、有機栽培等を先進的に実践している農場での実習も可能です。
専攻職種：酪農、野菜（有機栽培を含む）、鉢物、切花、苗木

東京 F I A 推薦研修生募集中！！

東京 F I A ではただ今平成18年度研修生を募集中です。友人、知人、どなたでも「ぜひ！参加させたい！」という若者をご存知でしたら紹介してください。東京都内在住の農業後継者、全国の非後継者、みんなのサポートで「若者の夢」を後押ししましょう。応募締切りは8月31日、選考会は9月1日です。

■ポスター・パンフレットの配布、掲示のお願い
店頭、学校、会社などでポスターを掲示していただける方、職場などでパンフレットを配布していただける方、喫茶店、取引先などに置いていただける方、いらっしゃいましたらご連絡下さい。すぐにお届けいたします。みなさまのご協力をお願いいたします。

連絡先 (社) 国農協 足達聡
adachi@jaec.org 03-5703-0254

スクラップブック

農業者大学校で
3時間の講義を体験



「私の畑に
手伝いにおいで！」



引用：農業者大学校（多摩市）

<http://www.farmers.ac.jp/>

ルンルン通信 23

安田 弥生（H9/スイス）

報知新聞 2006年2月18日

■私の住んでいる家の近くに独立行政法人農業者大学校がある。実はこの大学校の存在は、私が八ヶ岳中央農業実践大学校を卒業し地元に戻って来てからも何度も噂を聞いており、知っていたのだけれど、調べて探して行ってみるということはしていなかった。噂によると、外からいろいろな立場の方が講師としてやって来て講義をするというからおもしろい。一度行ってみたいと思っていた。

■願っていると叶うのが、私の努力しないでここまでやってこられた運のようなもの。講義の依頼が舞い込んでくれた。それも農閑期というグッドタイミングで、私は二つ返事でお引き受けし、返事をしながらも、すでに頭の中はどんな学校かなあ、久々に若い学生たちのエネルギーに会えることが楽しみでならなかった。

私が在学していた頃の八ヶ岳農大の名簿には、住所の後に経営作物と規模が表記してあった。もちろん非農家の私にとっては初めて見るその名簿が不思議でならなかった。私の同級生には、非農家の人は5人くらいで、経営規模の欄の空白も少なかったが、八ヶ岳農大でも年々非農家の割合が高くなってきているので、どこも同じようなものかと予想していた。特に、都内にある農者大となると、非農家がかなり多いのかと思ったら、その予想は大きく外れ、全国各地から集まっている学生たちはほとんどが農家出身の学生で、非農家は学年に一人くらい、しかも、男性が多く、女性もまた学年に一人くらい。八ヶ岳農大とは、かなり状況が違っていた。ところがやはり、農者大でも学生数が減ってきていますと、先生はチラッと苦しい表情で話されていた。

■実際に行ってみると、私の畑から車で30分ほどの近さ。緑の多い地域だったけれど、畑や動物が学校にはいないと聞いて驚いた。さて、3時間の講義は、私にとって初めての長丁場。話す内容が不十分だろうと見越して、使えそうなあらゆるものを持っていった。農水省やNHKが収録した畑の映像や、八ヶ岳農大時代やスイスの農業研修当時の写真。そして、いま畑にある大根と人参を試食用に持っていき食べてもらい、畑通信や、将来の理想を描いた絵、私の記事が載った雑誌も持っていった（違うページを見ていた学生も多し。コラッ！）。

■昼食の後の時間。それでなくても眠たかろうと予感はしていた。あの手この手でなんとか起きていてくれたので、私も、興味を持ってくれた学生や、来年海外研修に行きたいと言っている学生には、講義終了後もしばらく話をしていた。

■おもしろかったのは、地方の農家出身の学生に、「土曜や日曜は休みで、畑のない学校で退屈でしょ？ 私の畑は近いから、手伝いに来なよ」と声をかけたところ、「えー、どうせ卒業したら家で一生畑やるから、東京にいるときはいいよー」と、照れ笑い。それでも、何人かが私の畑に行ってみたいと言いはじめると彼もまんざらではなさそうに話を聞いていた。

■また今年もアメリカへ行く研修生が4人ほど4日間、風の畑に研修に来る日がやってくる。春になると新しい出会いが楽しい。農大生も卒業を迎える季節。

■日本の農業と一緒に盛り上げていこう！

講演・出版のご案内

異文化共生 シニアの国際貢献 臼井道雄（S32/米3）

海外ボランティア活動で学んだ異文化共生と国際交流を語ります。

期 日： 7月10日・24日・31日
8月7日・21日
9月4日・11日・18日（毎月曜日）
場 所：横浜市上郷地区センター
横浜市栄区上郷町1173-5
TEL：045-92-8000

会 費：4,000円（全期間）
申込締切：6月21日（水）
連絡先：（社）国農協 足達聡
adachi@jaec.org
03-5703-0254

都会人流 食と農のかかわり 本間惇（S41/米1）

食料自給率1～2%の首都圏に住む者として、食と農をもっと身近に知る必要があり、もはや国民の義務でもあります。食生活と農に密着するお話をあらゆるジャンルから分かりやすく検証します。さらに生産者と共生し、発信する事で、日本の農業を元気にもする提言をいたします。日常の生活に生産・流通・消費を抱え込み、あなたも積極的に参画することで社会貢献し、豊かな人生を拓いてみませんか。

期 日： 6月3日・10日・17日
7月1日（毎土曜日）
場 所：東京農業大学世田谷キャンパス
1号館2階207教室
東京都世田谷区桜丘1-1-1

受講料：8,000円（全期間）
申込：お問合せ下さい
連絡先：（社）国農協 足達聡
adachi@jaec.org
03-5703-0254



今川和彦 編集
東條英昭 監修
アドスリー出版
¥2,520

■いざ生の扉へ

- クローンとエピジェネティクスの新展開 -

本書は、2005年に行われた第104回日本畜産学会にて「クローンとエピジェネティクスの新展開」として開催されたシンポジウムをまとめたものです。講演内容を、大学、短大の畜産・獣医・応用動物科学系・理学・生物学系の学生の皆さんや研究者、技術者あるいは臨床家にも十分に理解していただけるように編集し直しました。

講演内容のまとめと合わせて、各著者の紹介では、現在の研究を始めたきっかけや苦労話、研究（人生）に影響を与えた出会い、ことば、などについてご執筆いただき、とくに、これから研究者を目指そうと考えている人たちのためのよい参考書になって欲しいと考えてつくりました。この本には、21世紀にサイエンティストになり、生き抜くためのヒントがいっぱい詰まっています。それぞれの最前線に立って研究を続けておられる研究者の勇気ある言葉や苦労話も堪能してください。

今川和彦（S50/米2/東大助教授）

ご協力お願いいたします

見舞金ご協力のお願い

(社) 国際農業者交流協会

去る5月16日夜、現インドネシア受入農家である栗本孝彦氏（米2：S49年度、元和歌山国際農業交流協会会長）宅の母屋が全焼の被害にあいました。幸い栗本氏やご家族、そして配属研修生に怪我などはありませんでしたが、農繁期の一番忙しい時期での災害に少しでもお力添えが出来ないものかということで、関係者の方々と相談の上、協会が事務局となって下記の要領でお見舞金を募らせていただくことになりました。ご賛同いただけるOB・OG・関係者の皆さま、ご協力の程どうぞよろしくお願いいたします。

■ 栗本農場火災見舞募金

募金額： 一口3千円（何口でも可）
募金期間： 平成18年6月30日（金）まで
振込先： みずほ銀行蒲田支店
普通 3322994
口座名： (社) 国際農業者交流協会
担 当： 受入業務課（坂元良二）
連絡先： 03-5703-0254

ジャワ島中部地震災害被災者への救援金

インドネシア、ジャワ島での地震で被災された方への救援金にご協力をお願いいたします。

■ 郵便振替

口座名義：日本赤十字社 口座番号：0010-2-5606
受付期間：平成18年6月30日（金）まで
通信欄：振替用紙に「ジャワ地震」と明記ください。
手数料：郵便局の窓口でご協力いただきますと振替手数料は免除されます。
郵便局ATMからのお振込みの場合、手数料が別途かかります。
* 全国の郵便局の窓口にご協力いただけますと振替用紙でのご協力もいただけます。
* 「免税証明」をご希望の方は、通信欄に「受領証希望」と明記して下さい。

■ イーバンク銀行での受付

口座名義：日本赤十字社 国際救援金口
(ニホンセキジュウジシャ コクサイキウエンキングチ)
口座番号：ジャズ支店 201-7009683
受付期間：平成18年6月30日（金）まで
手数料：イーバンク銀行口座からのお振込みの場合、振込手数料は免除されます。
* 「免税証明」をご希望の方は、
お振込みの際、お名前とご住所を明記してください。

【お問合せ】 日本赤十字社 組織推進部 電話03(3437)7081

■ 編集後記

本年度から派遣事業が新しいプログラムとしてスタートし、6月末にアメリカに旅立つ若者が、米国2年制による最後の研修生となる。効率化を求める時代の流れにあって、プログラムも変わらざるを得ないのとはわからないでもない。しかし「未知の夢」にチャレンジしようという若者にとって、海外での農業研修がいかにより有用であるか。OB・OGである私たち自身が、広く社会にアピールしていく時ではないだろうか？たとえ制度は変わっても、時代の流れに迎合しない「人づくり」の理念だけはいつまでも変わらずに持続続けたい。（村田）

- 編集発行 -
東京国際農業者協会
〒144-0052
大田区蒲田5-39-2-6F
(社) 国際農業者交流協会内
TEL:03-5703-0254
FAX:03-5703-0255
E-MAIL:fia@owl1.owls.co.jp
発行責任者：村田 正

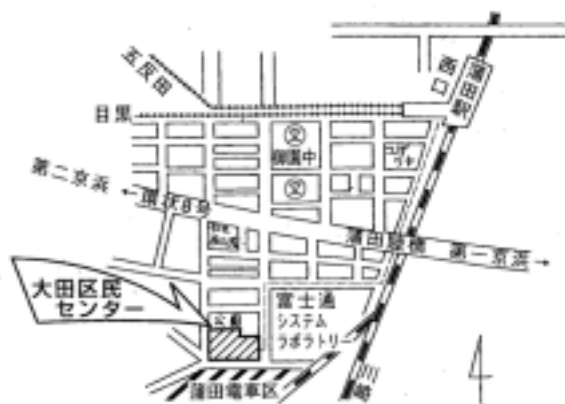
平成18年度東京F I A総会のご案内

帰国報告会・歓迎懇親会

来る7月2日(日) 平成18年度総会および帰国報告会・歓迎懇親会を開催いたします。欧米での研修を無事修了し、遅し
くなって帰ってきた青年達の土産話を聞きながら、新しい仲
間たちの歓迎の集いにしたいと思います。みなさまのご参加
をお願いいたします。



大田区民センター



アクセスマップ

開催日：7月2日(日)

開催時間：14:00

会場：大田区民センター
第9教室

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □
□ 13:00 役員会 □
□ 14:00 帰国報告会 □
□ 16:00 総会 □
□ 17:30 歓迎懇親会 □
□ 19:00 閉会 □
□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

<歓迎パーティー>
楽しい仲間と語ろう
本年帰国者 無料

問合せ先：03(5703)0254 担当：足達

大田区民センター

東京都大田区新蒲田 TEL:03-3734-0761

●JR京浜東北線「蒲田駅」下車徒歩15分

東京国際農業者協会

東京都大田区蒲田5-39-2-6F
(社)国際農業者交流協会内

TEL:03(5703)0253
FAX:03(5703)0255

申込書

お名前

お申込	時間	参加料
☐ 帰国報告会	14:00	-
☐ 総会	16:00~	-
☐ 歓迎懇親会	17:30~	¥3,000

ご住所

電話・FAX・Eメールでお申込下さい。
締切：6月26日(月)
参加料は当日会場で支払い下さい。

お電話番号

委任状

署名

私は7月2日開催の平成18年度総会において、
本間悖会長を代理人に定め議決権を行使することを
委任いたします。

印

* 総会に出席できない方は委任状に署名捺印の上、FAXしてください。

